

日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA



第229回 定期演奏会

絢 な す 音


2020年 2月19日(水)

豊洲シビックセンター 5Fホール

午後7時開演(6時30分開場)

■主催 特定非営利活動法人 日本音楽集団

■後援  公益^{財団} 日本伝統文化振興財団
JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION

■助成  文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

演出:久本 桂子
構成:田野村 聡
舞台監督:中島 隆

文化庁

日本音楽集団
www.promusica.or.jp



彩り鮮やかな糸をめぐらせ煌びやかな模様を織りなす、という「絢」。
そこには、目で捉える煌びやかさだけではなく、内なるものを磨かなければ
真の「絢」とはならない、という意味も介在しています。

令和元年、創立55周年を迎えた日本音楽集団。55年の確固たる歴史の上に、
これからも音を織り続ける・・・。

そのような思いを込めた今回の定期演奏会では、躍動感溢れる「颯踏」、
華やかな源氏絵巻「源氏三綴」、そして三宅一徳氏による委嘱初演曲と音を紡ぎ、
フィナーレにはビッグバンドさながらの「パルパ」と、絢なす音を織り上げます。
日本音楽集団の「絢」をお楽しみください。

1. 颯踏

(1975年／長澤勝俊 作曲)

[笛] 新保 有生 [打楽器Ⅰ] 島村 聖香 [打楽器Ⅱ] 盧 慶順

1975年の初演の際には「笛と打楽器のための音楽」という抽象的なタイトルで発表されたが、後に雅楽に由来する「颯踏」という名が付けられた。作曲者によれば、作品の主眼は篠笛と能管という2種類の横笛の性格を打楽器との合奏の中で際立たせることにあるという。全体は2章に分かれており、第1章では能管が冒頭で幽玄な世界を存分に繰り広げたのちに、即興的に導入される鼓や鑿の余韻と絡み合っゆく。第2章では締太鼓のリズムに乗って篠笛が祭囃子を思わせる軽妙な旋律を奏でる。後半に現れるシンコペーションも作曲者ならではの持ち味である。

(第211回定期演奏会プログラムより)

2. 源氏三綴

(2008年／福嶋頼秀 作曲)

[笛] 芝 有維 [尺八Ⅰ] 米澤 浩 大賀 悠司 [尺八Ⅱ] 阪口 夕山 田野村 聡

[三味線] 杵家 七三 [琵琶] 藤高 理恵子

[箏Ⅰ] 桜井 智永 石井 香奈 [箏Ⅱ] 久東 寿子 渡辺 正子 [十七絃] 丸岡 映美 岡山 亮子

[打楽器Ⅰ] 山内 利一 [打楽器Ⅱ] 盧 慶順

[指揮] 稲田 康

『源氏物語』は54帖からなる大作ですが、本作品は特定の帖や場面を描写している訳ではありません。その象徴的なイメージを、邦楽合奏による音の挿画として3つの楽章にまとめたものです。

第1楽章(折々の光)では、例えば「尺八1、2」とか「三味線、十七絃」のように、2つの楽器が言葉をたたみかけるかの様にメロディーを演奏します。第2楽章(幼と妖)では尺八と三味線のソロでスタートし、後半は妖しい響きの中でかすかにわらべ歌が聞こえます。第3楽章(めくるめく)は Rond 形式で、鈴の音を伴う主題が繰り返される運命の様です。

(第190回定期演奏会プログラムより、作曲者)

3. わとわ

(委嘱初演／三宅 一徳 作曲)

[尺八(一尺六寸)] 原郷 隆 [尺八(一尺八寸)] 田野村 聡 [笛・尺八(二尺三寸)] 竹井 誠
[三味線] 簗田 弘大 [琵琶] 久保田 晶子
[二十絃] 三宅 礼子 [箏] 桜井 智永 [十七絃] 久本 桂子
[打楽器] 細谷 一郎(助演) 山内 利一
[指揮] 苫米地 英一

「輪」と「和」をモチーフにした3つのMiniature Garden.

輪廻転生、生々流転、永遠の営みの中で巨視的には同じ様な事象がひたすら繰り返され、微視的には繰り返しの中で様々な摩擦と新たな変化が引き起こさている。

曲中各々のパートが持つアイデンティティはある時は他パートと同調し、ある時は位相のズレや距離感による関係性の変化を起こしつつも、各々のペースを大きく崩す事なく保ち続け、また過度に破壊的になる事なく他者との適度な緊張感と共に概ね和を保ち続ける。

特色として20絃箏を通常のダイアトニックではなくペンタトニックで調弦する事で絶対音域の拡大と、13絃箏の持つ豊かなレゾナンス特性を指向。

20絃箏が開発された経緯とは別視点からの原点回帰かつインベンション的側面も持つ楽曲でもある。

I) 廻(めぐる)

ディベルティメント的性格。

5(2+3)拍子のリズムの上に3+3+3+2=11拍の諧謔的なモチーフが踊り、5(3+2)拍子の歌を引き出す。素数のせめぎ合いの中に和を見出だす。

II) 霧の円庭(きりのえにわ)

間奏曲。円を描くゆったりとした和みの時間。枯山水に浮かび上がる砂紋の如く。

III) 輪舞曲(ろんど)

3+3+3+2=11拍という端の欠けたいびつなワルツのモチーフが支配するロンド。

他者との距離感において周期的に自己を再確認しつつ、他者を巻き込んで大きな輪を形成していく。

(作曲者)

4. 組曲「パルパ」

(2016年／川村裕司 作曲)

[笙・箏] 稲葉 明徳(助演) [箏] 三浦元則
[笛Ⅰ] 新保 有生 [笛Ⅱ] 孫 瀟夢
[尺八Ⅰ] 原郷 隆 [尺八Ⅱ] 竹井 誠 [尺八Ⅲ] 大賀 悠司
[尺八Ⅳ] 田野村 聡 [尺八Ⅴ] 阪口 夕山 [尺八Ⅵ] 米澤 浩
[三味線] 穂積 大志 長井 麻江 [琵琶] 久保田 晶子 藤高 理恵子
[二十絃Ⅰ] 久本 桂子 伊藤 麻衣子 [二十絃Ⅱ] 三宅 礼子 喜羽 美帆
[十七絃] 丸岡 映美 森 真理子
[打楽器] 細谷 一郎(助演) 盧 慶順 山内 利一
[指揮] 稲田 康

パルパとは、北海道日高地方のアイヌ語で「風を起こす」「火を扇ぐ」の意。

1 楽章【海は広いな】

露(ふき)の下に住むと言われる小さな神様コロポックルが初めて海を見た時の感動をイメージ。

今回は二人の笛ポックルをフィーチャーします。

2 楽章【駆けっこ】

草原を、平原を、風のように駆けぬける馬、コロポックル、そして人。色々な障害を乗り越えます。

3 楽章【イイライケレ】

アイヌの人達の感謝をあらわす言葉「ありがとう」。

以上3曲、私のオリジナルでお送りします。ジャズの醍醐味アドリブも随所に演奏されます。楽しんでお聴きください。

(第217回定期演奏会プログラムより、作曲者)

